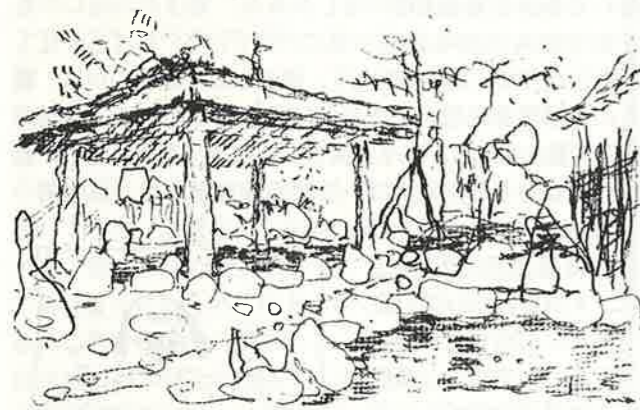


シリーズ隠れた建築紹介～よくできた露天風呂とは～

新潟には日帰り利用できる温泉施設が数多くある。「新潟 ぶらり 日帰り 立ち寄り 湯」(新潟日報事業社刊)を見ると大小86の日帰り湯が載っている。私はもともと温泉好きということと、設計という仕事でも、場所柄どうしても温泉を取り込んだ施設の計画に出会うことが少なくない為、休みの日に休養と見学を兼ねて、そんな日帰り温泉に行ったりすることがある。

特別マニアックな秘湯を訪ねてゆく訳ではないし、何か人様に聞かせられるような「こだわり」がある訳ではないが、温泉経験を重ねてきた中で、ここ一年位の間に「気になり出し、また何となく見えてきたこと」がある。それは、「よくできた露天風呂の法則とは？」みたいなものである。



「よくできた露天風呂」といっても、それを成立させている要素はいろいろある訳で、周りの風景や泉質に始まり諸々挙げればきりが無いと思うのだが、私の尺度としては「長くただらと入っていることができる露天風呂」というものが何よりも一番先にある。

ではそんな露天風呂はどんな「つくり」になっているのか？というのがいつも気になる場所である。それはどんなことかといえば……

1. お湯があんまり深くない
2. 自分の場所づくりができるポイントが用意されている(湯内・外問わず)
3. 視界が開けている

といったようなことで、また視点を「つくり」から拡大してゆけば、お湯が熱過ぎない、とか、いろいろなお湯がある(打たせ湯等)とか、人と対面して入ってもあまり近すぎない等とりとめもなくもっと挙げられる。そしてそんな私の中にできてきた基準から、身近で楽しめる温泉だなどと思えたお湯に新潟の村上市瀬波温泉の「龍泉」がある。入館料大人800円で一般の人が普通に利用できる日帰り温泉施設なので、そちら方面にお出掛けの方は是非寄られては、とお勧めしたい。

—広報部会・松澤 茂

北陸支部インフォメーション

- 北陸建築文化賞決まる
4月の支部役員会において、下記の作品に対して96年度北陸建築文化賞を授与することが決定されました。
- 学校法人和光幼稚園・社会福祉法人新通保育園(新潟)／(株)都市・建築設計事務所／植田清史
- 福井市下馬中央公園(福井)／遠藤秀平建築研究所／遠藤秀平
- 桜井甘精堂北斎亭(長野)／(株)寒川商業建築研究所／寒川徹司
- 97年度北陸支部総会
日時：97年5月27日(火)
13:30～14:30 通常総会
14:40～16:10 講演会「これからの都市に期待される技術」
日本建築学会 尾島俊雄会長
13:30～16:10 96年度支部共通事業設計競技入選作品展
16:20～18:00 懇談会
会場：メルパルク金沢(金沢市玉川町9-15)
- 97年度北陸支部大会
○7月26日(土) 信州大学工学部
開会式(8:45～9:00) 研究発表会(9:00～12:20)
奨励研究成果発表(11:00～11:30)
集中討議(11:00～12:20)
北陸建築文化賞作品展示(8:45～13:30)
- 7月26日(土) ホテルメトロポリタン長野
シンポジウム「どうする？環境教育 環境教育の現状と課題」
(14:00～16:00)／定員150名、無料
北陸建築文化賞受賞作品発表会(16:10～16:50)
同上表彰式および懇親会(17:00～19:00)
- 7月25日(金)
長野オリンピック会場見学会(14:00～17:00)
定員40名。参加費2,000円。集合14:00(信州大学工学部駐車場)。参加希望者は氏名・所属・電話番号を明記して葉書あるいはFAXで下記に申し込む。
〒380 長野市若里500 信州大学工学部社会開発工学科・山口満
- 建築文化習慣'97行事
建築探訪「富山の歴史遺産—城端町および井波町の街並み」
日時：6月29日(日) 9:00～16:00
定員：40名(申し込み先着順)
費用：2,000円(昼食代等)当日徴収
往復葉書に氏名、勤務先、部署、同住所、電話番号を明記して下記に申し込む。日本建築学会北陸支部富山支所(〒930富山市愛宕町2丁目4番地 富山県建築士会 TEL 0764-33-1245 FAX 0764-33-1289)
- 97年度「親と子の建築講座」予定(新潟支所)
第1回：9月27日(土)、第2回：10月11日(土)
第3回：11月8日(土)
- 97年度支部共通事業
「壁式構造設計基準・指針・同解説講習会」
日時：11月14日(金)
会場：メルパルク金沢
定員：100名

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第10号

発行日 1997年5月1日発行
発行 日本建築学会北陸支部広報部会
松澤 茂(新潟) 加藤 則子(富山)
船戸 慶輔(石川) 後藤 正美(石川)
桜井 康宏(福井) 土本 俊和(長野)
事務局 室田 文男・瀬口さゆり
〒920 金沢市玉川町5-15
TEL 0762-20-5566 FAX 0762-60-1502

特集
民家の宝庫、信州を語る



支部ニュース「AH!」の第10号をお届けいたします。広報部会の委員が2人交代して、創刊以来のメンバーは部会長のみとなりましたが、今回はほぼ予定どおりの刊行となってホッとしております。特集「北陸らしさ」の最終回となる今号では、長野支所の民家研究グループの皆さんにお集まりいただき、民家への思いをおして信州の地域性と建築文化の課題を語っていただきました。専門外の部会長にとっては新鮮な刺激を与えられたと同時に、北陸支部という地域の広さと多様性を改めて教えられたように思います。

さて、創刊号から第5号までの特集「女性と建築」シリーズに続く「北陸らしさ」のシリーズも各支所を一巡したことになり、そろそろ次の企画を準備したいと考えております。また、創刊以降3年を経過したということで、構成・レイアウト等についても見直す必要があるのでは……とも考えております。部会長個人としては「ようやく慣れてきた」というのが正直なところですが、御意見・アイデア等がございましたら、是非とも広報部会までお寄せください。



民家の宝庫、信州を語る

広報部：いま上田市の民家調査を終えたばかりで、たいへんお疲れのところですが、集まっていたいただきまして、ありがとうございます。きょうは、民家が豊富に残っている長野県をテーマに気楽にお話しただけらと思えます。

民家の新しい見方

広報部：長野県の民家調査はいつごろから盛んに行われるようになったのでしょうか。

吉澤：民家調査は昭和40年代にかなりさされているよね。だから、僕らの世代になると、調べる事とか調べる物とかがあまりないんだよね。でも、実際に調べてみたら”もちこみゆか”という形式があったり、間取りなんかも市町村史で書かれている形と違う物がでてきたりして、上田はそれほど調べられていないのかなと思うときがある。しかし実際はかなり細かく調べられているんだけど、そういう点で今の民家調査はやっぱり視点がかなり変わってきていると思う。当時は論理的に判断していくというか、例えば内法が低ければ古いとか、指標がかなり限定されていた。実際調べてみるとそうじゃない物がたくさんあるから、調査すべきことはたくさんあると思う。

広報部：全国の民家と比べて長野県はどうでしょうか。

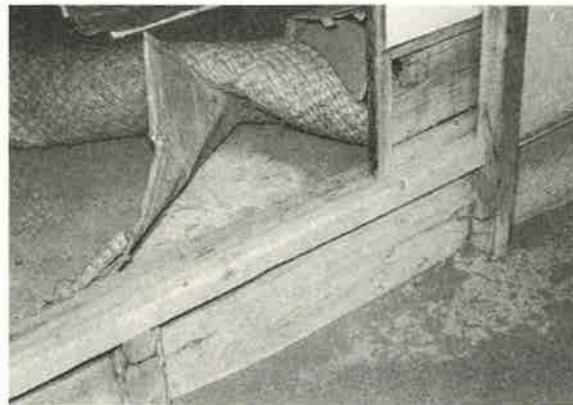
高村：長野県にいろんな種類の民家があるというのは聞いています。僕は北信の方しか知らないけれど、旅行して回ってみると、北の方にいくと屋根勾配の急な茅葺き民家、西の方へ行くと元は板葺きじゃないかと思うような民家が多い。また瓦葺きの物もあったりと、とにかくありとあらゆる物がある。地域的な要素もあるんだと思うけど、それにしても同じ長野県でどうしてこんなに多くの形式があるのかと思っておもしろい。全国で長野県だけかもしれない。

広報部：民家の遺産が多く残っているという事実がまだまだ長野に住む人たちに伝わってない気がします。こういうことを県民に知っていただけるとまちづくりなどに活かせると思う。

星：それは僕も感じます。それを感じさせないのは普通の所にこういった古い建物が残っているからじゃないかな。

高村：これだけたくさんの民家形式があるのはいろんな地域に接しているからなのかな。

吉澤：それから、地形が複雑だからね。関東平野のように平らだと茅とかの材料の入手方法が種類だけど、ここは茅にしても山の物と川の物、それから山にある木で作っている。



もちこみゆか(上田市古安曾・関家/吉澤政己氏撮影)

高村：それに、新潟へ行くと今度は雪がいっぱい降るから形式が決まってくる。その形式に似ているのが北信の新潟に接している地域で、その辺りは勾配が急なんです。飯山あたりがそうです。岐阜の方へ行くと今度は石置き屋根の物が多くなる。南へ行くと愛知の影響でまた違う物になる。風土によっての特色を長野は全部持っていると思う。

上田市では

広報部：上田市は過去にも調査をかなり行っているのですか。

中沢：以前の建造物の調査は単に小県史の変遷過程を調べる上で行った物でした。

吉澤：基本的にはそうでしたね。当時は民家という建物が調査対象にはなっていなかったから、現状の把握や史料からどのような変遷が組めるかを調べた。多分全国の物差しを持ってきていると思う。本来なら物差しという物は地域毎に変えて行くべきだと思う。古い民家があるからいいということではなく、今回は物差しを変えて民家を調査する機会ができた。

中沢：上田市が行政として民家調査をおこなうのは今回が初めてですね。

広報部：上田市の民家は現在調査中ですが、いまのところ市民の反応はどうですか。

久保田：今回調査をおこなった家の方は、調査されることによって自分の家が大切な物であることを再確認したと思います。

吉澤：民家調査にはあまり女性が参加していないから、



左:信濃建築史研究室 吉澤政己さん

右:(財)文化財建造物保存技術協会 高村功一さん



左:前橋工科大学 星和彦さん

右:上田市教育委員会社会教育課 中沢徳士さん

女性として何か感じることもあるんじゃないですか。久保田：私の場合、民家の部屋をどのように使おうかということを考えてしまう。

吉澤：そういう見方に対して、僕は調査をしていると元がどういった形だったかを考えてしまう。

中沢：上田市で近代建築の調査を去年やったときには、その家の人がよくきてくれたといわんばかりに、自信を持って見せてくれたけれど、民家のような茅葺きの建物になってくると、こんな汚い家を見ないでくれといった感じにいる。

高村：今まで建物を残してきた過程が、残そうとして残ってきた場合と残るべくして残ってきた場合で、住民の意識が違うからね。上田市を見てみると、土地が大きいから空いている場所がたくさんある。だから、そこに新しい家を建てるよね。僕から見ればかなり富裕なのかなと思う。

吉澤：県内を見ても上田市だけじゃないかな。他は、今まであった家をつぶして新しい家を建てる。上田市では、新しい家を別に造って、それまで使っていた家は納屋とかに使っている。逆に言うと、古い物がよく残っている場所だね。

高村：古い物と新しい物が平行して残っているのは珍しいですよ。

中沢：壊すのにもお金がいるしね。新しい方につっちゃうから。

吉澤：ある意味で合理的なのかもね。

高村：でも残していくのも大変なんですよ。ほっときやいって物でもないし、維持していきなきゃいけないし。



総2階茅葺の民家(上田市下塩尻・田沢家/吉澤政己氏撮影)



左:上田市教育委員会社会教育課 久保田敦子さん

右:信州大学工学部学生 古本哲朗さん

吉澤：上田市の民家の特色というのは、民家の形式云々を抜きにしても古い家を納屋に使っているということだと思う。だから、今日調査した家でも昭和30年代に新しく家を建てて、古い家を納屋に使っている。昭和30年代は、まだ高度経済成長以前の頃だから、かなり古い形式がそのまま残っている。復原に苦労しない。

中沢：住んでると改築しちゃうからね。

高村：そう、逆に住んでいないから古い形式がよく分かる。

民家をこうしたい

広報部：今日の調査に参加して学生の立場からどういう印象をもちましたか。

古本：僕は城下町の生まれで、実家周辺で町屋とかを見ているはずなんですけど、あまりその記憶がなくて、でも調査に参加して何件か民家を見ていく内にすごくいい家だなと思いはじめました。木造で、おちついた雰囲気、開放感があります。

広報部：畑さんは自分の地元と比較してどうですか。畑：僕の地元は滋賀県なんですけど、実家の周りにあまり古い家がなく、大学に入って初めてまともに民家を見た気がします。でも、理屈抜きで民家という建物がいい家だなと感じています。

吉澤：滋賀県は民家の技法的なものと言えば、比較的民家がよく残っている場所なんだよね。だから、また地元に戻れば、また違った目で民家を見られるんじゃないかな。

広報部：では、民家の中でどういった部分が好きですか。古本：座敷が好きです。他には、民家の構造や建具、また、窓から見える庭の見え方などが好きです。

畑：僕は土間が好きです。土間は直接地面に接しているから、その土地に根づいたということがよく分かる部



左:信州大学工学部学生 畑智弥さん

右:広報部 土本俊和

分だと思えます。

広報部：座敷に比べると、土間は改築されて見応えがなくなっている場合が多いけれども、土間には「これが民家だ」という姿がある。

高村：農家というのは土間で生活していたようなもので、上の部分というのはほとんど寝るだけ。昼間はずっと野良にでて行ってるから。とにかく土間の面積が広いから、上と下で用途が全然違うんだよね。

広報部：現代の住宅というのは土間という空間がほとんどゼロに近い状態で、まあ、玄関に少し残っているかもしれないけれど。日本の住宅が本来持っていた魅力という物を捨てちゃって、快適できれいな物を残していったところがあるけれど、土間空間を見直すというのは現代の住宅を見直す上で重要だと思う。

星：土間という空間には自然との調和という物が感じられますね。

高村：京都でもそうだけど、秋田県の方では土間を「庭」と呼ぶから、もともと、外部空間的な意味があったのかもしれない。

吉澤：久保田さんは土間についてどう思う。

久保田：私なりの土間空間の利用の仕方は、犬を飼ってその犬が庭から土間までは自由に出入りできるようにしたい。

広報部：都会では考えにくい贅沢な発想ですね。

吉澤：もともと、厩のある場所というのはその家で一番贅沢な場所なんだよね。昔は馬という物は大切な物だったから。それが改造していくと厩が子供部屋になっていく。馬を飼わなくなって子供が一番大切になるからね。

吉澤：今日はあまり風がなかったけど、民家にはいると風の流れを感じられる。

星：建築をつくる基準にも風という要素は考えられていますね。

吉澤：何が優先されているかだね。少なくとも日照という物はあまり考えられていないね。日照のいいところは厩になるからね。

民家をどう受け継ぐか

広報部：ある一つの集落の中に庄屋クラスの家が一つ残って、その残った家をどう使うかはその家の人に権限があるんだけど、例えばその家の長男に所有権があるのは偶然にすぎなくて、それをこれまで支えてきたのは周囲の人々の労働力なんだから、所有者個人がその建物をどうするかを決めるというのは違うと思う。その人個人の問題じゃないと思う。

高村：生きてりゃ80、90ぐらいの人ならその建物の歴史を知っているからその価値が分かるんだよね。もっとひどいのが新しい家を建てちゃって、その家に移ってしまう。そうすると、古い家は自分たちの生活圏外にあ

ることになるから、だんだん邪魔になってきちゃうんだよね。その建物の歴史を知っているかどうかというのはものすごく重要な問題なんだよね。

吉澤：そうだね、単に補助金を出せばいいという問題じゃないからね。

高村：お寺なんかの宗教建築がよく残るのは、そのお寺が所有者個人のものじゃなくて信者全員の物だからね。民家も所有者個人のものじゃなくて家族の物なんだから。ここで言う家族は狭い意味の家族じゃなくて、もっと広い意味の家族の物として考えなきゃいけない。

吉澤：民家の保存の仕方というのは高村さんが言ったように、いろんなことを考えていかなければいけない。単に残せと言っただけじゃなくて、家族のこととか地域の問題とかを考えて、むしろそういったところから声を高くしていかなければいけない。単に建物を見て古いから残すという評価の仕方では残っていかない。

広報部：このあいだ民家を残すときに高断熱・高気密について建物をどうすればよいかという質問を受けたんだけど二通りの答えがあると思う。一つは、台所や寝室など住むところは高断熱・高気密にして、座敷はそのままにする、という答え。もう一つは、高断熱・高気密でない住居というものにも魅力がある、という答え。お年寄りには無理かもしれないけれど、若い人とか自然がいいという人には大きな魅力だと思う。

星：そうですね。そういう住居の魅力というものを住む人に理解してもらうということが大切なことですね。

広報部：女性から見ると民家というものはどう見えますか。

久保田：もっとモダンな感じで使いたい。台所とかがあるままじゃいやだし、寒そうというのがある。また、収納スペースが少ないというのがあります。それらが解消できれば、私なら住みたいと思います。

中沢：民家というものはプライバシーがないですね。昔の人はあつけらかんとしていたんでしょうかね。

広報部：あつけらかんとしていたんでしょうね。

星：それに生活のルールというものがあつたんでしょうね。ヨーロッパの家というのはとぎれることで空間を分けていたからね。

吉澤：遊郭の調査をしたときには、広い部屋についてがあつただけだからね。だからそのついでに空間の境だったんだね。

星：だから、日本人というのは見えない境界っていうものにすごく敏感だったんだろうね。

広報部：建築にかぎらず、文化遺産を継承しようという考え方は今では世界共通のテーマですが、実際問題としてそれぞれの地域で文化遺産を継承しようとする、歴史的な遺産の残り方は文化によって異なるから、それぞれの地域の文化を深く理解していないといけないですね。

—1997年3月18日収録—

大きく変わる佛都長野市

今、長野市は来年2月7日から行われる冬期オリンピックを目前にして市内各所で建築・道路整備工事に追い込みをかけ最終仕上に入っています。交通面に於いても高速道路の開通をみて首都、又中京名古屋へも3時間内外で結ばれ、念願の新幹線も11月開業に向けて調整段階に入り、日本の中心地として大きな動脈交通網が出来、地域活性化・産業流通面に於いて飛躍発展が期待されます。

“佛都”長野市の街並整備も長期計画で進められていますが、駅舎を中心に今東西駅前は一変されようとしています。旧駅舎は唐破風造りの寺院建築の外観で訪れた多くの人に善光寺のお膝元にふさわしく印象深く残っている事と思います。保存維持の賛否ありましたが、解体され近代的な駅舎が完成しつつあります。私自身旧駅舎のイメージを継承した外観を期待していましたが周景の調和も最も大切な事と思いつつ全体の完成を楽しみにしています。

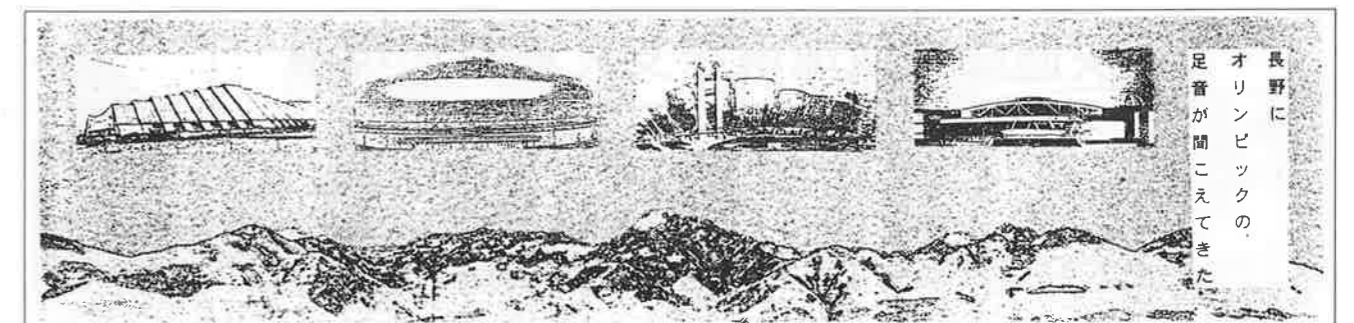
善光寺側の西口駅前に唐屋根を象徴した“国宝善光寺表参道”の唯一のシンボルアーチを通り中央通りを北上すると大門町通りの街並が一望できる。電柱電線を地下ケーブル化し、通り口には石燈籠が建立され、松の木との調和が良く、歩車道は石畳で整備された沿道の建物は復元改築・改修され、地域の方々の熱意と努力により官民一体と成った街並景観造りが完成した。日頃車で通り過ぎるのを反省し、近頃は見ながら歩く楽しい表参道と思っている。仲見世通りを過ぎ善光寺本堂を目の前にした時改めて先人が造営した文化遺産に感激を覚えます。

善光寺は4月6日から5月31日迄7年毎の行事・御開帳が間もなく始まります。“牛に引かれて善光寺参り”。今年は丑歳の御縁もあります。是非皆さん“遠く共一度は参れ善光寺”。長野市の街並景観共々牛歩のごとくゆっくりと!!。

—北野建設株式会社・北原由也



大門町街並



(信州大学大学院・望月康行)

私のふるさと新潟



私は新潟生まれの新潟育ちである。

この25年間、何気なく過ごしてきたが、私はこの街がとても好きである。

一昨年から新潟・万代島再開発事業に携わり、今までとは違う視点でこの街を見つめられるようになった。

自然が豊かで、四季の変化がはっきりしていて、食物がおいしい。この仕事に携わるまでは当たり前のように思っていたが、これらは大変恵まれていることなのだ。

新潟に生まれ育った人達は、これらのことを深く意識することなく、ごく自然に過ごしている。新潟は顔のない街のように感じられるが、私達がこの自然を大切にしていきたいからなのではないだろうか。

新潟はこれから新しい風が吹き、街の顔ももっと新鮮に見えてくることだろう。そんな日が早く来ないかと待ち遠しい反面、今の新潟らしさをずっと感じられる街であってほしいと思う。

これまで新しいものができても、最初だけ興味を示し、すぐに冷めてしまうといった傾向があつたように見受けられるが、新潟の持つ雰囲気や溶け込める、馴染みやすいものができることを願っている。

そして、私のふるさと新潟がもっと魅力ある街になり、たくさんの人達に親しまれるようになる日が、本当に楽しみである。

—万代島再開発事務所・大橋奈津美

「雑木林のクラフト展」



オルゴール (材: ナツツバキ)

高岡短期大学の林哲三氏、工房KAZUの浦田和夫氏、他の方々とともに、「雑木林のクラフト展」を開催した。1週間の期間中、千人近い人々が会場を訪れ、おおむね好評であった。展覧会の主旨は、雑木林の利用価値を高めることが雑木林を存続させていく上で

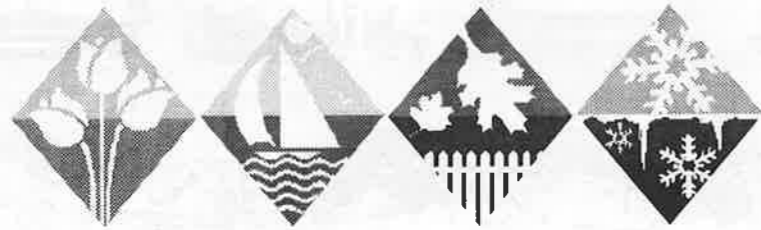
重要であり、雑木を使って玩具、文房具、家具等の様々な製品を造ることができるということであった。

雑木林は、多くの樹種(主として広葉樹)から構成されており、収穫や材の生産管理にコストがかかる。一方、雑木林には伐採後放置しても自然に同じ森林が再生するという針葉樹人工林にはない長所がある。森林における生物の多様性という点でも優れている。将来は、雑木林と針葉樹人工林の利点を生かした森林整備が行われていくであろう。また、永続的に利用可能な資源の一つとして、雑木林の材の利用技術を追及していくことは、グローバルな環境問題の観点からも意義のあることと思う。

私たちは、この展覧会をきっかけとして「やまぼうしの会」をつくった。現時点で個人が雑木を利用してものづくり生計を立てていくことは難しい。県下には雑木の材の供給体制や製品の販路が確立していないからである。会では、事例的な取り組みとして、雑木製品の制作にたずさわる人々に対し、材料調達や技術面で協力しようとしている。そして、ささやかにせよ、実際の商品として売られるようにすることが次の目標である。

—富山県林業試験場・石田 仁

快適な生活環境を支える自然環境



(金沢工業大学・丸 尚美)

早春の奈良散策

友人の誘いをうけ、3月下旬に奈良を訪れた。私は大学生の6年間を奈良ですごし、去年の4月就職に伴い、郷里である石川県に戻ってきた。

近鉄奈良駅の構内から外に出ると、懐かしさについて大学の方向に足が進んだ。とはいっても、手土産一つ持っていなかったため、研究室を訪れ先生に挨拶するでもなく、狭いキャンパスの中庭をぐるっとひと巡りしただけで、校舎を後に東大寺へとむかった。

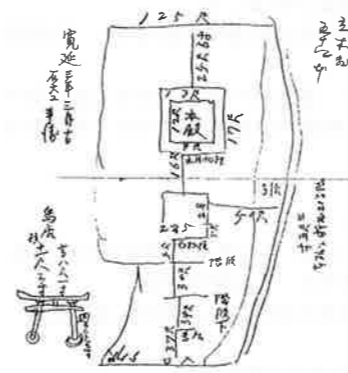
暦の上では春とはいえ、早春の奈良はまだ寒さが残り、少し期待していった桜も蕾が少し色づいたといった程度だった。入場料が必要な大仏殿は中門から眺める程度にして、そのちょうど裏手、北側にある道を二月堂へとむかう。この坂道は、奈良を中心に活躍した写真家・故入江泰吉氏がこよなく愛した道である(と聞いている)。素朴な印象の土塀と、緩やかに曲線を描きながら二月堂へと続く道は、確かにとても絵になる。その坂道に続き急な勾配の階段を登ると二月堂である。眼下に奈良の市街地が広がる。大仏殿の屋根や遠くに連なる山々を見ながら少し休憩。今度は若草山の裾野に続く道から春日大社へとむかう。途中、制服を着た女子校生の大群を見て思わず一緒に記念撮影をしたり、土産物屋の店先のブリクラにキャーキャー言いながら挑戦している外国人観光客を発見。「こっちのほうが、今の日本の文化を正確に楽しんでいる姿なのかもしれないなあ…」と思って少しおかしくなったりした。春日大社ではちょうど結婚式がとりおこなわれていて、白無垢姿の花嫁に、幸せのお裾分けを少ししてもらったような気分になった。

—私の奈良旅行は、この後もう少し続くのですが、文字数と本人の文才の関係上ここまでにします。もし、ここまで辛抱強く私の文章を読んでくださった、少しでも奈良に行きたいなあと思ってくださった方がいらっしゃれば幸いです。奈良は、夏には夏の、秋には秋の(もちろん冬には冬の)趣がある美しい街です。是非、足を運んでみてください。

—金沢市役所まちなみ対策課・塩谷真佐美



一冊の古手帖を見つけて



こうも春と言うのに梅雨空の日が続くと、家に引き込まれてしまう。明治十年頃に建てられた土蔵が私の家であり、そんな日は、子供達のソフバレーの遊び場兼、私のフォーククロックのコンサートホールである。8ピートの“青春の光と影(Both Side Now:J. ミッチェル)”を48才のオジさんが気持ちよく淋しく唄うのである。

樺のねじ曲がった中柱を中心に3間×5間、昨年床を約百年ぶりに貼り替え明るい。白シックイ壁はほど良い明るさと、吸音性がいいので耳にやさしい。

ギターの手が疲れた。2階に母屋から藁縄で吊り下げられた祖父の手帖がある。その一冊を、濡れた背戸の青竹が覗く小窓のそばで、湿ったページを順にめくってゆく。図が出た。『昭和5年 当村神社新築云々』と何やら鉛筆書きの配置図が出て来た。本殿、拜殿、鳥居と現在の在所の社そのものだ。

と、その中に『寛延三年 石大工…』と記されている。判った！今はその右鳥居は文字が摩滅し読めないが、約70年前にはまだ御健在であったのだろう。—うれしい、実にうれしい。寛延三年というのは1750年、宝暦の前で、むろん天明大飢饉(1781—1788)の一世代前である。たぶん当村は御利益があったのか、子孫だけはこの通り…？

今の時代、時間に追われ、息も見えない日々が多い。この土蔵は我が家のタイムカプセルである。今年の暮の寄り合いにこの古手帖の事を村に話そうと思う。二本足の石鳥居、2000年には250才、吾が子孫までも行く末よろしくの想いで階段を降りて扉を閉めた。すると『お屋よ』の声と共にチーンのエレクトロニックの音が私の耳を突いた。啞々。

—株式会社アーサ・桜川幸夫

さいきん四十になった男が思うことは、やっぱり酒のことである。この酒という奴はどうもこの男と離れたくないらしい。それどころか、ますます濃い仲になっている。ひところは命のみずだったが今ではその命そのものともいえる。男はある蔵に出入りしているがそこは酒蔵ではない。酒ではないがよく似たものを熟成させ長い間ねかせておくのが仕事らしい。そして、そこにも時代のなみというのがやってきて、ずっと手づくりであった職人男の仕事が機械仕掛けになった。そんなことは気にも掛けないかのように、男はいつものように仕事着をおき蔵の錠を下ろし夜半の帰路につく。一町歩ほどあるくと田のなかへでる。あかりのまったくないところで、ぐいっと上を見る。満天のほしのなか冬の大三角形がある。織り穏もみえる。そして東の空の低いところ、ほかのほしと少し離れてあかく光る大粒のほしがある。男はそのほしの名を知らない。しかし何故か気にいっている。しばらく見て納得したらば、また歩きだす。帰るとまず湯につかる。職人の男は湯を好む。ピシピシに突っ張った体には湯が何よりの贅沢なのだ。人生最高のいつときである。さて、あがったとおもったら男は一升瓶の首を掴んで、茶の間の円卓に陣取る。そこにあった湯飲みを引き寄せ、すりきれいっぱいまで注ぐ。口からむかえにいつて一寸すすする。湯飲みをもちなおして、ぐいっとやる。喉を鳴らし終えると湯飲みを置き、だれに憚ることもなく満足の極みともいうべき大きな息をひとつ吐く。それは息とも声ともつかぬ、いわば心の唸りである。湯は体を潤し、こ奴は心を潤す。人生半ばのこの男、今きた半分を懐かしみ、これからのもう半分に想いを馳せる。そして旨い肴と隣に聞く人あれば、ぼつりぼつりと語りだす。職人の酒はそういう酒である。こういうときの酒はひたすら辛く、ひたすら呑みつけ得るのがよい。そんな男の酒は、わが富山の散居村・礪波平野から産まれる。こ奴の名は、う名酒(うめえさけ)・立山という。



らくけんちくそうぞう
—株式会社楽建築創蔵・鮫島謙太郎



(福井大学大学院・阪本一有)